

東南官衙地区および左京六条二坊の調査 —第118次・124次

1 はじめに

農林水産省近畿農政局では、2000年度から大和平野農地防災事業として大和平野の老朽溜池の改修工事を実施している。調査部では、その一環として計画された高所寺池(櫛原市高殿町)堤防改修工事にともなう事前調査を事業開始時点からおこなっている。初年度には、高所寺池の南岸および東岸の南半分について発掘調査をおこなった(飛鳥藤原第113次『紀要2001-II』)。

2001年度には、池の東岸北半分、北岸と西岸北部を対象とし、これに西北隅の底樋改修工事範囲をくわえて調査区を設定した(飛鳥藤原第118次調査)。調査区は順に、東区、北区、西区、北区拡張区)。

2002年度は、第118次調査西区に接する南延長部分を調査対象とした(飛鳥藤原第124次調査)。調査は池の西岸に幅約11m、長さ100mの調査区をもうけ、取水口埋設部分については堤を横断する調査区を設定した。

2次にわたる調査区は、藤原宮南辺と藤原宮東南官衙地区において、六条大路推定地を含む。これまで、藤原宮南辺の東部では、大垣などの施設が確認されていなかったので、これらの確認が期待された。

第118次調査は、総面積1830m²、調査期間は、2001年10月29日から2002年2月20日。第124次調査は、総面積1100m²、調査期間は2002年10月24日から12月20日。

2 検出遺構

検出した主な遺構には、大垣、外濠、内濠、六条大路北側溝、掘立柱建物・塀、溝、井戸、土坑などがあり、5世紀後半～藤原宮期の遺構が中心である。

藤原宮南限施設と六条大路 第118次調査東区・西区と第124次調査区において、南面大垣、内濠、外濠、六条大路北側溝などを検出した。

南面大垣SA2900は、第118次調査東区と第124次調査区で、柱穴各4基を確認した。柱間約2.7m(9尺)等間の掘立柱塀。柱掘形は一辺約1.5m、柱穴の深さ1mから0.8mあり、柱はすべて抜き取られていた。

内濠SD502は、南面大垣の北11.7m(40尺)にある素掘溝。第118次調査東区で検出幅2.7m、深さ1.3mあり、断

面形はV字形に近い形をしている。第118次調査西区では検出幅2m、深さ1.1mあり、断面形はほぼ台形をしていた。内濠は、下層に砂やシルトなどの流水堆積層があり、上層は埋め戻した土層であった。

外濠SD501は、南面大垣の南17mにある素掘溝。断面形は台形である。第118次調査東区では検出幅4.5m、深さ1.2mあり、第124次調査区では、幅4.5～4.7m、深さ0.7mあった。外濠SD501の埋土は、内濠と違って最上層まで流水堆積層の砂や粗砂で、埋め立てた痕跡に乏しい。第124次調査区では、埋没した外濠の上面で、完形に近い丸瓦と平瓦が意図的に並べられたようにみえる状況で多数出土したが、性格不明である。

内濠の南北には、掘立柱建物2棟と東西溝3条がある。掘立柱建物SB9750は、内濠SD502と大垣の間に位置し、北側柱が内濠に近接している。約3m(10尺)等間の梁行2間×桁行2間以上の東西棟建物である。柱掘形は、一辺約1.2m、深さが約0.7m。北側柱柱掘形の北側の壁は垂直ではなく、傾斜している。おそらく、内濠の南肩を壊さないように配慮したもので、SB9750は内濠掘削後に建てられた可能性が大きく、両者は併存していたと推測される。

SB9750の南側柱から南へ約1.5m(5尺)の位置で東西溝SD9745を確認した。幅約1.2m、深さ約30cm。流水痕跡とみられる砂が堆積する。この溝は大垣から約3m(10尺)北にあり、大垣の北雨落溝の可能性も想定されるが、大垣の南側に同様の東西溝が確認できること、過去の調査で大垣雨落溝の検出例がないことから、SB9750の雨落溝とみるのが妥当と考える。

内濠の北にも東西溝と掘立柱建物がある。東西溝SD9645は、内濠SD502の北約2.2mにある素掘溝。溝幅約1m、深さ0.3m。東西溝SD9646は、内濠SD502の北約6.5mにある素掘溝。溝幅約1.4m、深さ約0.6mある。この2条の東西溝と重複して、梁行2間の東西棟建物SB9648がある。柱掘形は一辺1.2～1.6m、深さ約1m。重複関係からみてSD9646より古い。

第124次調査区では、六条大路北側溝SD2915を検出した。幅約2.4m、深さ約0.6m。灰褐色粘質土と灰褐色砂質土が堆積しており、黄灰色粘質土で埋め立てていた。藤原宮東南官衙地区 第118次調査東区には、内濠に接してL字形の素掘溝、東西溝SD9560と南北溝SD9561があ

る。溝の幅1.3~1.5m、深さ0.4~0.6mあり、SD9560は西に、SD9561は北に傾斜する。溝がL字に折れるあたりに、大量の瓦が埋没していた。

第118次調査北区では、掘立柱塀を5条確認した。

掘立柱東西塀SA9580は、北区南辺に平行して東西23間、総延長61mを検出した。柱掘形は一辺1~1.5mあるが、池底での確認だったので、柱穴は深さ0.3~0.5mしかない。柱間は約2.7m(9尺)等間。南面大垣からの距離は52.7m(180尺)。なお、SA9580の東端から6個目と10個目の柱穴は、第113次調査北トレンチを調査する際に土壤改良したため、確認していない。

東西塀SA9580の西端には南北塀SA9605がとりつく。二つの掘立柱塀がとりつく位置より南は調査区外となるため、正確にはここでL字形に折れ曲がるのか、南北塀SA9605が南に延びてT字形になるのかは確認できなかったが、内濠との間に東西方向の区画施設がみつからなかつたので、L字形に折れ曲がるとみてよからう。東西塀SA9580の西から6間目には掘立柱南北塀SA9595、14間目に掘立柱南北塀SA9585、23間目に掘立柱南北塀SA9575がとりつく。4条の南北塀も、柱間はいずれも9尺等間である。柱穴の深さは、0.7~1mあった。

東西塀SA9580と南北塀SA9605との交点部分は柱穴が2個重複しており、同様な状況が南北塀SA9575との交点部分にある。南北塀SA9575以東にも東西塀SA9580が続くかどうかは、遺構面が破壊されていたため、確認できなかった。以前の調査では、東西塀SA9580の東方で柱穴1個を確認している(藤原宮第66-14次『藤原概報23』)が、SA9580とは若干ずれていて一連の柱穴にはなりそうにない。したがって、南北塀SA9575が官衙区画の東限塀になる可能性も十分あると考える。

区画のなかには、顕著な建物遺構などを確認しなかった。区画の西南隅には東西塀SA9615がある。一辺0.5mほどの隅丸方形の掘形をもち、柱穴の深さは0.5m。

上記の官衙区画の西には、掘立柱建物SB9600・9601がある。建物SB9600は南廂付きの東西棟で、梁行は2間、桁行は2間分を検出した。柱間は約2.7m(9尺)等間。身舎の柱掘形は、一辺1.2~2m、深さ1.1~1.3m。廂の柱掘形は一辺1.3m、深さは0.7m、底に角材の基礎盤を据える。柱はすべて抜き取られていた。

SB9600の東側に南北棟建物SB9601がある。梁行2間、

桁行は5間以上、柱間は約2.7m(9尺)等間で、柱筋が東西棟建物SB9600と揃う。南北とも妻柱は確認していない。柱掘形は一辺1.2m前後、深さ0.8~1mある。柱はすべて抜き取られており、東側柱は西へ、西側柱は東へ抜く。SB9601の西側柱筋とSB9600の東妻柱筋との間隔は約9m(30尺)、SB9601の東側柱筋と南北塀SA9605との間隔は約6m(20尺)である。

2棟の建物と重複する東西溝SD9633からも藤原宮期の土器が出土した。溝幅1~2m。鏡片が混入していた。

東西棟建物SB9600の北には、掘立柱南北塀SA9636と東西に長い長方形土坑SK9637がある。SA9636は、SB9600の東から2本目の北側柱と柱筋を揃える。柱間は約1.8m(6尺)等間であろう。柱掘形は一辺1.2mで、深さは0.5mであった。南端の柱穴には直径20cmの柱材が残っていた。土坑SK9637は、長さ4m以上、幅1.5m、深さ0.6mである。

宮内先行条坊と宮直前期の遺構 第118次調査東区で東二坊坊間路SF6030と東側溝SD6031を、北区の東端でその西側溝SD6032を、北区で六条条間路SF4750と両側溝SD4751・4752を検出した。

東二坊坊間路東側溝SD6031は、第113次調査区から連続し、検出した総延長は約180mとなった。今回は東岸が調査区外にあたため、溝幅は確認できなかった。最も広いところで、溝幅1.5m、深さ0.5mある。

藤原宮南限施設のうち、大垣SA2900と内濠SD502は、ともにこの東側溝SD6031を埋め立てた後に造営されていた。ところが、外濠SD501と東側溝SD6031との交点では、東側溝を流れる水が外濠に注ぐように溝底を掘り下げてあり、東側溝から外濠にむかって粗砂が流れ込むように堆積した状況が残っていた。つまり、外濠は一時期、東二坊坊間路東側溝と共存していたのである。

西側溝SD6032は、幅1.1m、深さ0.3mある。第113次調査区では、西側溝の掘り直しを確認したが、今回それはなかった。東側溝との溝心々間距離は東側溝心が求められないで確定できないが、約6.5~7mとみてよからう。これは、第113次調査で確認した掘り直し後の西側溝(SD6032B)による道路規格にほぼ合致する。

六条条間路北側溝SD4751は、幅0.4m、深さ0.3m、南側溝SD4752は、幅1~1.2m、深さ0.2~0.3m。側溝心々間距離は6.3m。

このほか、第118次調査東区の東西溝SD9567、北区東部の東西溝SD9576、西区の土坑SK9660や井戸SE9650などが宮直前期にあたる。第124次調査区では、土坑SK9731・9740・9743などがある。

土坑SK9731からは、完形に近い土師器小型甕が、SK9743からは、完形の把手付土師器甕が出土した。いずれも飛鳥IVの土器である。

土坑SK9740は、西拡張区の南西隅で全体の約1/4を検出した。東半分は、攪乱によって削平されていた。直径約3mの円形をなすらしく、残存する深さは約0.9m。埋土には多量の炭や木屑を含み、舗羽口や、建築部材のはつり屑などが出土した。おそらく、藤原宮造営にともなう廃棄土坑であろう。

7世紀後半以前の遺構 第124次調査区では、逆L字形に接続する南北溝SD9730と東西溝SD9729が7世紀後半の遺構であろう。ともに幅約0.5m、深さ0.25m。SD9730は土坑SK9731より古い。

東西溝SD9725とSD9720は7世紀中頃と考えられる。SD9725は、幅約2.7m、深さ約0.3m。上部を黄灰色砂質土で埋め立てていた。SD9720は、幅2.2~3.0m、深さ0.25m。この2条の溝は心々間で約19mの距離にある。条坊施工以前に、正方位にのるような何らかの区画をおこなったのであろう。とすると、SD9729とSD9730が逆L字形に接続するのも興味深い。

第118次調査東区の斜行溝SD9540は飛鳥Iの土器を出土した。第124次調査区南部の平行する2条の斜行溝SD9722・9724も7世紀前半と考えられる。SD9722は、幅が上端で約1.2m、深さ約0.6m、SD9724は、幅が上端で約1.5m、深さが約0.6mである。ともにV字形の断面形をしている。SD9724は、同じ位置で溝を埋めて掘り直していることを確認した。SD9725より古い。

このほか、第118次調査区の、掘立柱建物SB9543・9548・9625、竪穴住居跡SB9550、掘立柱塀SA9620、斜行溝SD9562・9565・9566・9664など、北で西に大きく振れる方位をとる遺構は、7世紀中頃以前と推定できるが出土遺物からは時期を特定できない。東区の井戸SE9570からは、埋める時に割られた須恵器大甕や韓式系土器、土師器などが出土した。北区の斜行溝SD9581・9582からは5世紀代の土器が出土した。

(花谷 浩・小谷徳彦)

3 出土遺物

第124次調査出土遺物については整理作業が十分ではないので、第118次調査出土遺物を中心に述べる。

土器類 縄文時代から近世に至る多量の土器が出土した。なかでも藤原宮期と宮直前期の土器が最も多い。しかし、藤原宮期や宮直前期とした遺構でも、7世紀代全般の土器が一定量含まれて、当該期の土器は多くない。

第118次調査東区東西溝SD9560と南北溝SD9561は奈良時代の土師器杯などを含む。藤原宮所用瓦が大量に埋没していたことからも、この溝は藤原宮以後も存続していた可能性がある。

藤原宮直前期の遺構は多く、出土土器も多量である。第118次調査北区東西溝SD9633からは大量の土器が出土した。須恵器では杯A・B・G・Hが、土師器では杯A・C・Hなど、7世紀各期の土器が含まれる。SD9633は、藤原宮期の南北棟建物SB9601建設以前に埋没しているため、宮期以前の遺構であろうが、出土土器は藤原宮期のものと明確な差異がない。同調査西区の土坑SK9660や井戸SE9650から多くの土器が出土したが、完形になるものはない。藤原宮直前期の廃棄土坑であろう。先行条坊六条条間路南側溝SD4752からはロクロ土師器杯Cが出土した。口径18.8cm。器壁は厚い。内外面ともにヘラケズリで調整する。第124次調査区の土坑SK9731からは、ほぼ完形に復元できる小型の土師器甕B、SK9743からも完形の土師器甕Bが出土した。

7世紀中頃から後半の土器は調査区全体から出土しているが、量はさほど多くない。7世紀前半の土器は、調査区全体から多量に出土した。第124次調査区の斜行溝SD9722・9724からは、飛鳥Iに属する須恵器杯H、土師器杯C・Hなどが出土した。須恵器杯A・B・Gなど新しい器種が含まれず、7世紀前半の良好資料である。

古墳時代の土器は第118次調査北区・東区に顕著である。北区では、斜行溝SD9581から陶邑編年TK47型式の須恵器杯身・蓋、無蓋高杯、甕と、土師器高杯がまとった状態で出土した。SD9581に壊される斜行溝SD9582からはTK23型式の須恵器杯身が出土した。また、第118次調査東区井戸SE9570や斜行溝SD9565では、外面に格子タタキを施した韓式系土器の甕や鉢が出土した。井戸SE9570からは、韓式系土器のほかに須恵器大甕や土

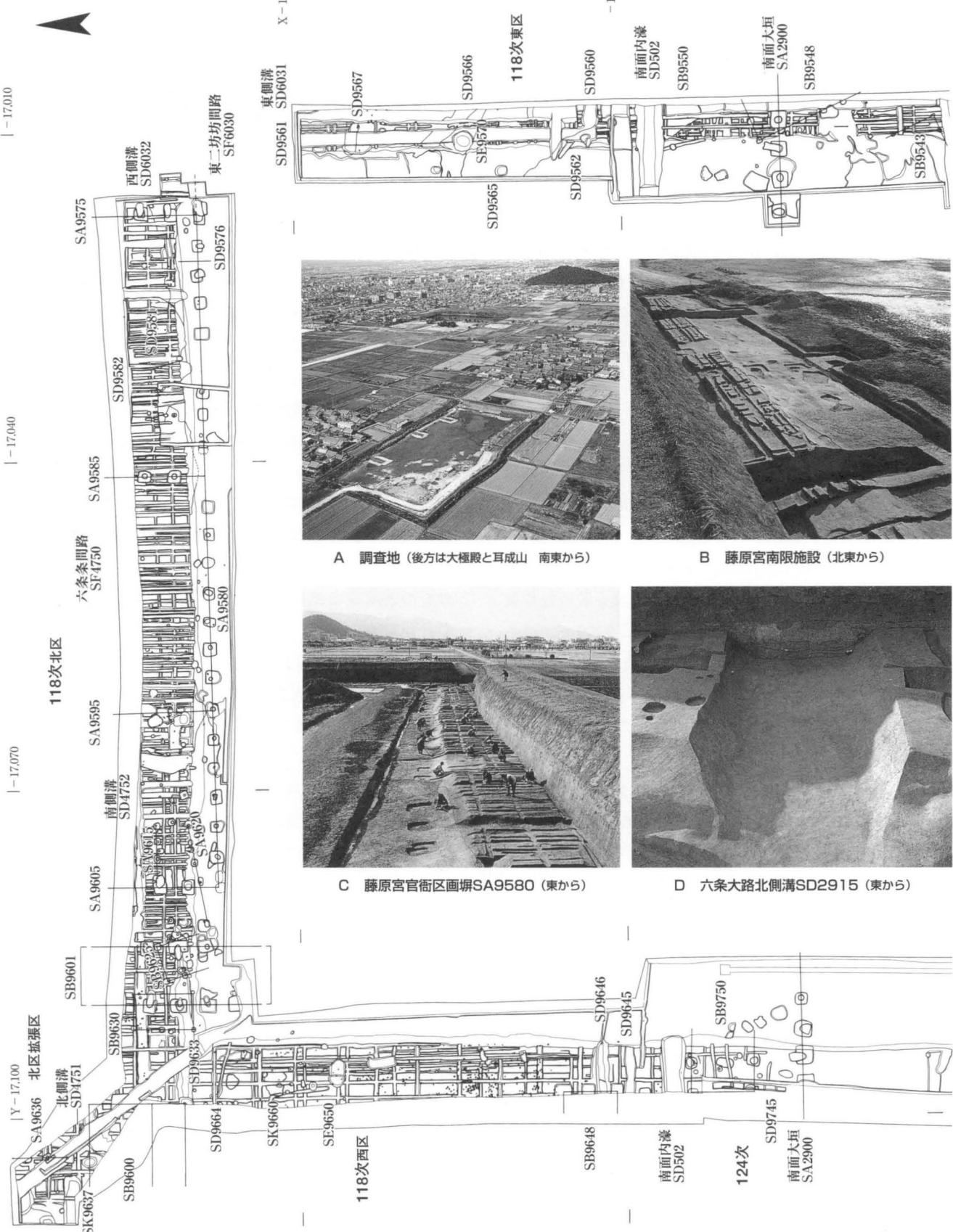
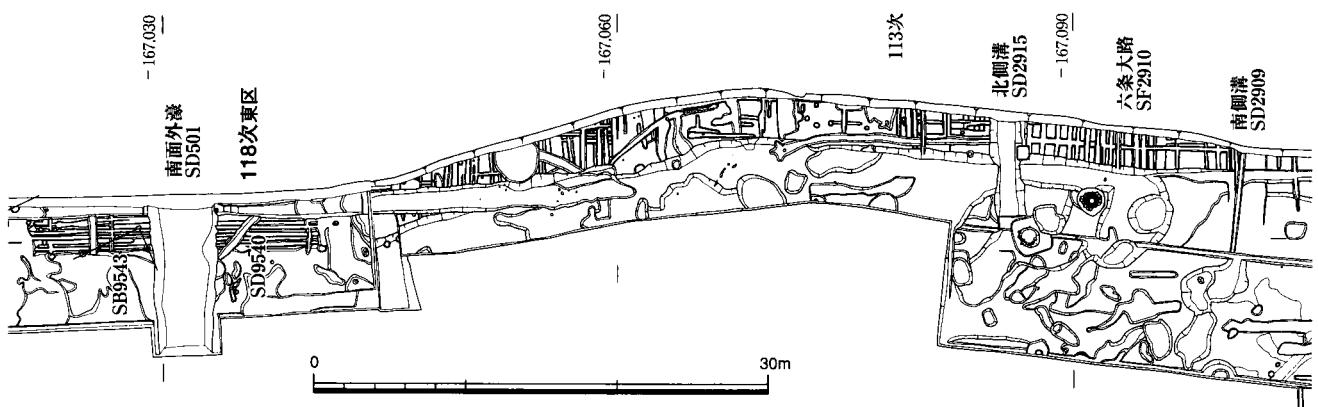


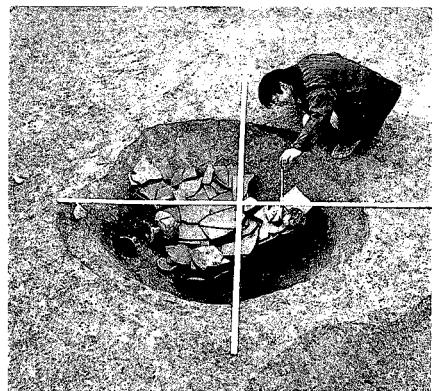
図83 第118次・124次調査遺構図 1:500



E 藤原宮南面内濠SD502 (西から)



F 外濠に流れ込む東側溝SD6031 (北から)



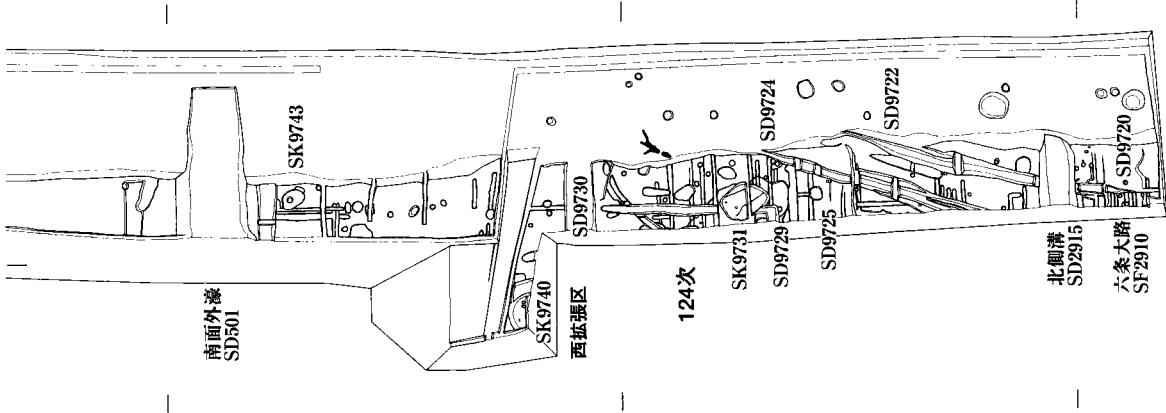
G 古墳時代の井戸SE9570 (東から)



H 藤原宮期の南北棟建物SB9601 (北から)



I 内濠に近接する東西棟建物SB9750 (東から)



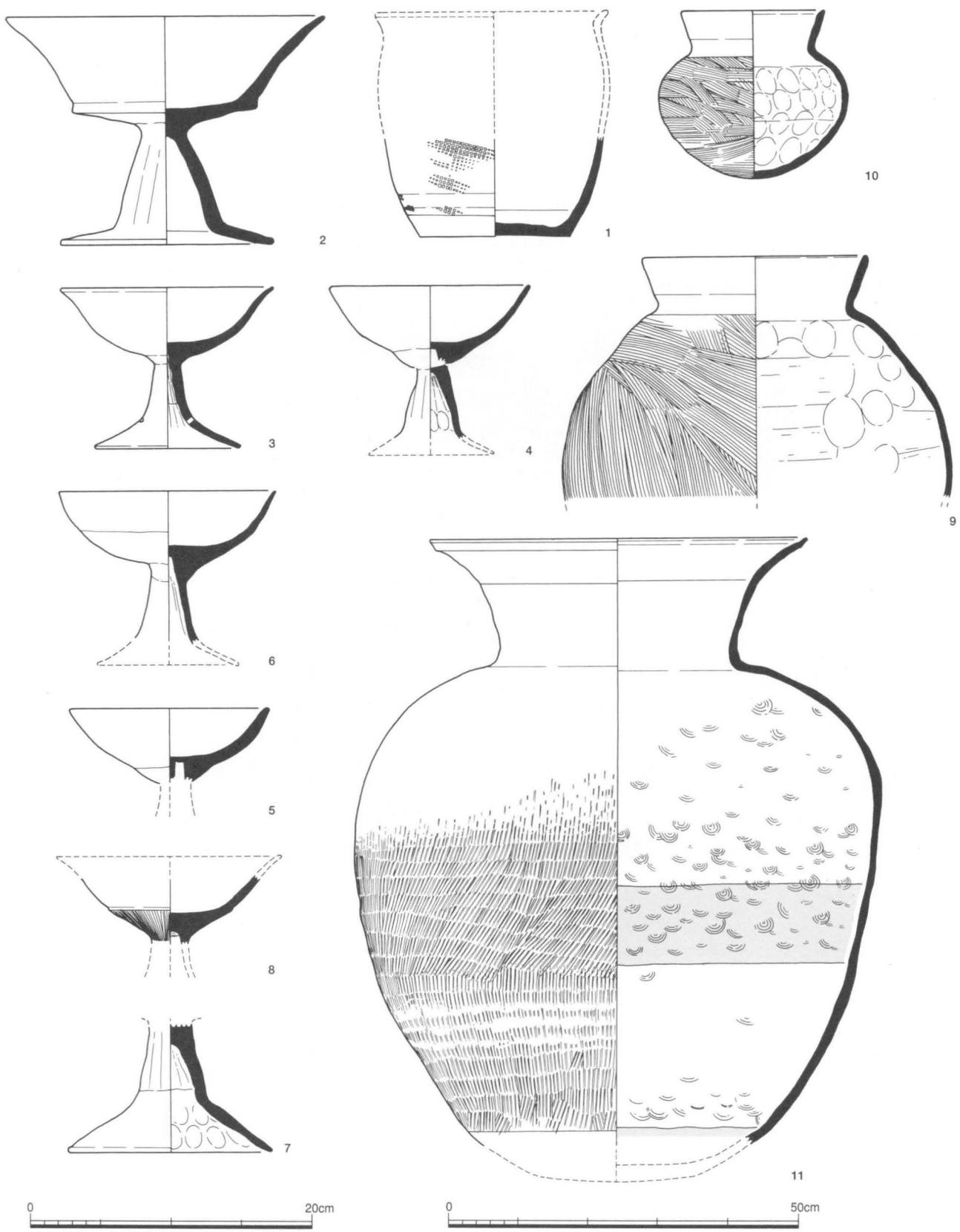


図84 第118次調査井戸SE9570出土土器 1:4 (ただし11のみ1:8)

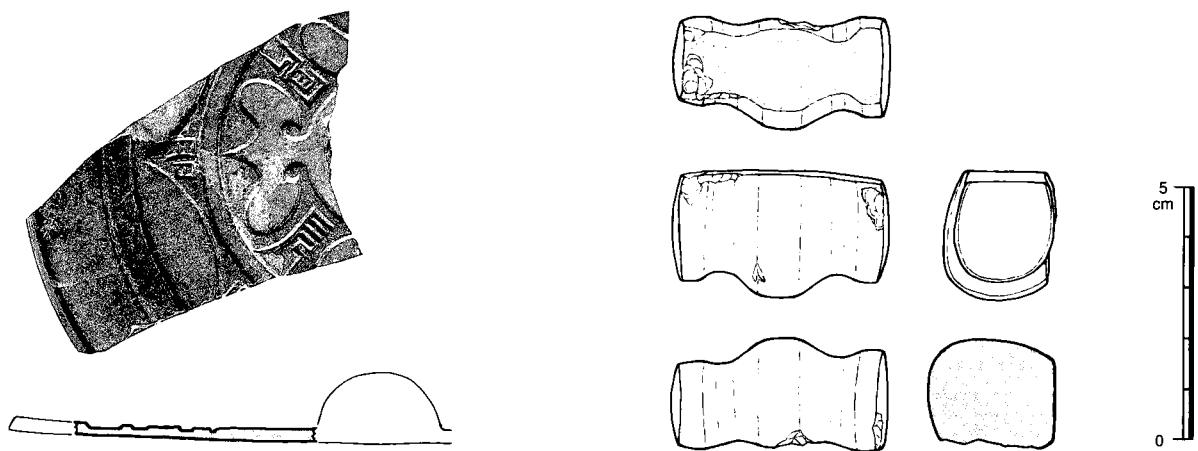


図85 内行花文鏡と三輪玉 2:3

師器高杯・甕などが一括で出土した(図84)。

1は、韓式系土器の平底鉢。底径10.8cm。外面は格子タタキ、内面はナデ調整。底部外面には一辺2.5cm四方の回転台ゲタ痕がわずかに残る。2~10は土師器。2は大型高杯。杯部は平らな底部から屈曲し、屈曲部には明瞭な突帯状の稜をもつ。脚部は、ふくらみをもつ柱状部から屈折して開く。口径15.1cm、器高16.2cm。3~8は高杯。いずれも摩滅している。杯底部よりゆるやかに内湾して立ち上がるもの(3~6)と、杯底部と口縁部の境に明瞭な稜をもつもの(8)がある。3~6の口縁端部は、外反するもの(3)、直線的に外傾するもの(4~6)がある。脚部はなだらかに開き、柱状部内面には絞り痕跡が残る。3は脚部中位の2方向に円孔を穿つ。4・5の脚部と杯部の接合部には、下方から穿たれた小円孔が残る。口径14.2~15.3cm。8は杯底部から口縁部境の稜線まで細かいハケ調整を放射状に施す。9は甕。口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさめる。口縁端部はヨコナデ、体部外面はハケ調整する。体部内面はヘラケズリを主体とするが、指頭圧痕も見られる。口径16cm。10は小型丸底壺。口縁部は直線的に伸びる。体部外面はハケ調整、内面には指頭圧痕が顕著に残る。口径10.2cm、器高11.9cm。11は須恵器大甕。口径54.0cm、残存高85.6cm。肩が張ったやや胴長の球形を呈する。口縁部は頸部からほぼ直立して立ち上がり、ゆるく外に開く。体部外面には平行タタキ目、内面には同心円文當て具痕が残るが、内面はナデ調整で丁寧に消している。この甕には、色調の異なる2種類の粘土が使い分けられ、底部と胴部中央のみに暗灰色の粘土、ほかは淡灰色の粘土を用いる。TK216型式以前のものである。

SE9570の土師器は、8のように布留式新段階の中でも古相を示す高杯がある一方で、椀形の杯部をもつ高杯が多い点や、口縁端部内面を肥厚させず肩部外面のヨコハケ調整がくずれた甕の割合が多い点などから、布留式

直後に位置づけできる。上ノ井手遺跡SE030や山田道第2次調査SD2570出土土器より新しい。

このほか、調査区全体から埴輪が出土した(総計37点)。家形埴輪片もある。円筒埴輪は4世紀代から6世紀までのものが混在し、新しい時期のものが多い。同じ藤原宮内でも、大半が5世紀前半の時期におさまる第120次調査区の埴輪(本書97頁)とは様相が異なる。(前岡季彰)

瓦 磚 第118次調査では、丸瓦58点8.7kg、平瓦595点141.7kgが出土した。ほとんどが藤原宮所用瓦で、SD9560・9561からその大半が出土した。軒瓦もすべて藤原宮所用品。第118次調査では、6273C、6274Ab・Bと6275A・B各1点、6276C 2点、6643Aa 1点、計8点が出土したほか、廐斗瓦1点と面戸瓦2点も出土した。面戸瓦は全長25cmの小型品。第124次調査では、6276C、6642C、6643Aa・Ab、6643C、6646Cが、計9点出土した。

金属器 第118次調査北区の東西溝SD9633から中国製の長宜子孫銘内行花文鏡片が出土した(図85)。

内行花文鏡片は、全形の1/8大の破片で、鉢を欠いている。復元面径は14.5cmである。鉢の周りに円圈帯と蝙蝠座があり、蝙蝠座の間に「長宜」の2文字が時計回りに読める。蝙蝠座の外周には圈帶(平頂素圈)がめぐり、内行花文帯には逆字の「明」1字が残る。櫛齒文帯や斜角雷文帯はない。銘文は「長宜子孫」と「明如日月位至三公」であろう。

石器・石製品 石器には、サスカイト製石鏃と石匙、サスカイトやチャートの剥片、柱状片刃石斧の断片などがある。石製品には、流紋岩製砥石、石英製白碁石、水晶製三輪玉各1点、滑石製円板1点がある。白碁石は第118次調査北区の長方形土坑SK9637出土、三輪玉は同北区の耕作溝から出土した。三輪玉は、長さ4.2cm、幅2.2cm、高さ2.5cm(図85)。

その他 錫型片、輔羽口片、椀形鉄滓、獸骨、獸齒、焼土、木屑などがある。(花谷)

4 まとめ

藤原宮南限施設と六条大路 今回、南面中門以東では初めて、藤原宮の南限施設を確認することができた。

まず、各遺構心の座標値を求めるに、第118次調査東区のY=-17,010.0地点では、大垣心がX=-167,014.3、内濠心がX=-167,002.6、外濠心がX=-167,031.3、西区での内濠心は、Y=-17,097.0の地点で、X=-167,004.2、第124次調査区のY=-17,096.0の地点で、大垣心がX=-167,016.0、外濠心がX=-167,032.9となる。

これらの数値と過去の調査成果をあわせて単回帰分析をおこなうと、いずれの遺構とも、非常に整合性の高い直線の式を導くことができる。実測値と予測値との差(残差)は、大垣で最大約50cm、内濠は最大約40cm、外濠は最大約60cmである。すべて東で北に振れるが、その振れは、大垣が $0^{\circ}45'55''$ 、内濠は $0^{\circ}45'50''$ と、両者ほぼ平行するのに対して、外濠は $1^{\circ}24'22''$ とやや大きく、それらと平行しない。

南面外濠だけが振れを異にする点については、すでに指摘がある(『藤原概報11』20~21頁)が、今回の成果により、振れの違いが南面の施設全体に及んでいることが確定した。大垣と外濠との距離が西になるほど広がるのは、各々の方位が異なることに原因していたのである。

今回、先行条坊東二坊坊間路東側溝SD6031との交点部分を調査し、外濠の掘削は東側溝埋め立て以前、大垣の建設と内濠の掘削は埋め立て後であったことが判明した。方位の違いは施工時期の違いによる可能性が大きい。

また、各施設の方位が確定したことにより、宮東南隅の確認を目的としながらも果たせなかった第15次調査(『藤原概報5』)は、外濠がかかる可能性はあるが、大垣と内濠は確実にその調査区北を通ることもわかった。

一方、六条大路北側溝については一筋縄ではいかない。第124次調査区Y=-17,096.0の地点の六条大路北側溝心はX=-167,088.4だが、これと過去の調査成果から六条大路北側溝の直線の式を求めるに、検出遺構との間に大きなずれを生じる地点が数多く存在する。したがって、少なくとも直線として施工されていないことは確実である。六条大路の幅員に関しても、側溝心々間距離で約16mとみる説と約21mとみる説があり、部分的な幅員変更の問題を含めて、調査事例の蓄積を待ちたい。

外濠と六条大路の間には外周帯がある。今回も、ここから藤原宮と併存するような遺構を確認できなかった。第124次調査区での外周帯の南北幅は、大垣心から六条大路北側溝北肩まで71.4m(約202大尺)、外濠南肩から六条大路北側溝北肩まで51.9m(約147大尺)である。

藤原宮の外周帯の南北幅については、大垣心から六条大路南側溝心の距離が225大尺(79.65m)、大垣心から六条大路北側溝北肩までが160大尺(56.64m)、外濠南肩から六条大路北側溝北肩までが80大尺(28.32m)と推定されている(井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』奈文研、1984年)。この数値は、今回の調査成果とは大きく異なるが、それは、大垣と外濠の方位の違いや、六条大路の幅員の問題と関連するのであろう。こうした点の解明も、今後の調査に委ねたい。

藤原宮東南官衙地区 今回、この地区について初めて広範囲な調査をおこない、内部の状況までは明らかにできなかったが、東西幅207尺と推定できる官衙区画と、その内部を3つに区分した掘立柱塀をみつけた。これまで藤原宮の官衙域では、内裏東方官衙地区において東西225尺、南北200尺の官衙区画を確認し(『藤原概報23・25・26』)、西方官衙南地区でも、東西300尺、南北200尺の区画(「区画A」)とそれに南接する東西200尺、南北205尺の官衙区画(「区画B」)をみつけている(『藤原概報26』)。今回、内部の建物配置は不明ながら、同様の区画を東南官衙地区にも確認できたことは貴重な成果である。

この官衙区画に隣接してその外に比較的規模の大きな建物がみつかった。検出した状況ではL字形の配置だが、コ字形配置になる可能性は大きい。このような建物配置は平城宮の官衙や古代の地方官衙遺跡でいくつも確認されてきた配置形態ではあるが、意外にも藤原宮ではこれまで確認例がなかった。今回の調査地は、宮の南面東門を入って東の地域にあたり、平城宮では式部省推定地に該当する。今後、藤原宮官衙地区の調査は、平城宮のそれとの比較研究にとってきわめて重要である。

このほか、藤原京条坊施工以前に、正方位にのるような区画をおこなったと推定される遺構や、古墳時代集落に関わる遺構・遺物、隠滅した古墳の副葬品や埴輪なども検出した。藤原宮造営以前の開発を示す重要な成果であり、調査地周辺での今後の調査が期待できる。

(花谷・小谷・小澤 紂)